



人参と馬

川崎ゆきお

「昨日あったことをエネルギーにしておく」

「はい、エネルギーとは。つまり、昨日栄養のあるもの、カロリーをとれば、それが今日のエネルギーになるという話ですか」

「朝食べたものは、昼にはもう腹が減るだろ。翌日まで持たん。だから、そういう意味ではない。精神的なもの、ここでは人参を意味しておく」

聞き手は、人参でぴんとくればいいのだが、そうはいかない。

「人参を食べるのですか。ニンニクとか、朝鮮人参じゃなく」

「食べ物の話ではない。ここでは西洋人参でもなんでもよい」

「お節料理に出る人参は好きです。あれは日本人参でしょ」

「そうではない。馬じゃ」

「ああ、馬が食べる人参」

「鼻先に釣り糸で人参をぶら下げておけば、馬は人参を食べようと、歩を一步出す。人参に釣られるわけじゃ」

「それは場所ですか」

「え？」

「だって、釣り竿を持ちながら乗馬はしんどいでしょ」

「そういう話ではない。精神的なことをいっておる。人参とは餌だ」

「馬の」

「人が欲しがっているものじゃ」

「報酬ですね」

「そうそう。それをここでは省略して人参と言っている」

「最初から、そう言ってくださいよ。もったい付けないで」

「ああ、悪かったのう」

「それで、昨日あったことを今日のエネルギーにするとはどういうことですか」

「よう、覚えておったなあ」

「だって、今日のお教えのタイトルがそうになってましたから」

「君だけのためにつけたお題じゃ。有り難く思いなさい」

「月謝払っていますから」

「そうか、じゃ、本題に入る」

「眠くないですか。その話」

「ない」

「本当ですか」

「まあ、聞け」

「はい」

「昨日善いことがあると、今日もそんな善い目に遭いたくなるもの」

「はい」

「終わった」

「もう終わりですか。早いです、師匠」

「長いのは嫌いだろ」

「そうですが、人参の話の方が長かったですよ」

「だから、昨日の善いことが人参なんじゃ」

「それは連鎖の話ですか」

「そんな難しい話ではない」

「はい」

「人と参で人参だ」

「ほう」

「だから、ただのニンジンではないぞ」

「西洋人参でも、朝鮮人参でも鳴門金時人参でもないのですね」

「人、参る。じゃ」

「どういう意味ですか師匠」

「降参しました。参りましたの参じゃ。だから、この人参は効く。そして、この人参に人は引っぱられる。馬ではないが、脳の海馬に来る」

「それで、どういう効能が」

「今日も昨日のように楽しく過ごしたいなあ、程度だ。その気持ちが起こるのは、昨日、善い日だったからだ」

「悪い日もあるでしょ」

「ある」

「そういうときは」

「善かった日の在庫の人参を使う」

弟子はそれ以上聞かなかった。

了